



みつちちゃんへ

---

田中かわず

---

そうか、みっちゃんはまだ18歳になったんか。この前会うたんは、みっちゃんが小学生のときやから、かれこれ6年か7年前やったな。ホンマ、ちょっと見ん間に大きゅう、その上べっぴんさんになって。おっちゃん、びっくりしてしもたわ。

田舎の兄貴は元気にしてるか？ 去年大阪で会うたとき、糖尿の数値が境界型から昇格したいうて笑ってたけど、体の方は大丈夫か？ そうか、そこそこに元気か。そりゃアよかった。今度電話したら、オレが無理すな言うてたと伝えといて。

田舎の山は、今頃、紅葉がきれいやろなア。この時期になると、オレは落ち葉を踏みながら、柿やらあけびを採りに裏山に上った子どもの頃の事をよう思い出す。しばらく帰ってへんけど、ふるさとはいいよなア。

みっちゃんは、この春、清明看護学院に入学したんやてな。これにはおっちゃん、驚いた。何を隠そう、オレが高校を卒業して浪速市に採用されて初めて配属されたんがその事務やねん。嘘ばっかりて？ いや、これはホンマ、掛け値なしにホンマの話やで。

あれは、オレが定時制高校を卒業して高松から大阪に出てきたときやから、みっちゃんより1つ上の19歳の時のことや。もうかれこれ30年前の話やな。

そうや、今日は時間があるから、看護学生とオレの恋物語でも聞かしたろか。今でこそこんなおっちゃんやけど、若い頃はナース殺しという異名がつくほどもてたもんやった。え、信じられへんて？ まあ、確かにナース殺しは冗談やけどな。

ちょっとビールでも飲むか？ いらん？ もうアルコールは卒業したて？ 20歳になったらアルコールはやめる言う話は聞いたことあるけど、18歳で早、卒業かいな。ちょっと冗談きついで。そんならコーヒーでも飲むか。

お〜い、母さん、みっちゃんにコーヒー、入れたってや。オレにはビールを頼むわ。

時代も変わり、兄貴もよう頑張ったから、今でこそそこそこの生活してるけど、昔の田舎は貧しいなア。親父とおふくろは、猫の額ほどの田畑を耕して生計を立ててた。ホンマ、家族が生きていくのがやっとやった。だから、オレは中学校を卒業したらすぐに高松の印刷会社に集団就職したんや。

みっちゃんは集団就職なんて言葉は知らんやろな。30年前といやア、日本の高度経済成長も終盤に入ってて、大阪ではあの大阪万博が終わり、太陽の塔から人だかりが消えて、ちょっと寂しゅうなった頃や。

貧しい農村の子らは、中学校を卒業すると集団で都会の会社に就職してな。これを集団就職言うんやけど、オレもその1人で、当時は金の卵なんて言われて重宝がられたもんやった。

オレは印刷会社に勤めながら定時制高校に通うた。思い出すとあの頃は、勉強にも仕事にも一心不乱やった。朝8時に会社に出勤して5時まで働き、それから学校に行って勉強して、授業が終わったらクラブ活動や。

オレはバスケット部に所属してた。授業が終わった夜の9時から10時すぎまで練習し11時前に寮に帰って風呂に入って寝る。そんな毎日の繰り返しやったが、今思うとこれまでの人生の中でも、あの頃が1番充実してたように思うな。何か生きてることに確かな実感があった。それに、頑張ればオレの将来には明るい未来が待っていると信じることができた。

オレが五月さんと出会うたんは、そんな高校生活を送ってた最終年のときやった。夏休みが終わって2学期が始まった初日に、担任の先生が愛媛県の八幡浜の定時制高校から転校してきた言うて、みんなに五月さんを紹介したんや。北風五月と聞いて、へえ、なんかきれいな名前やなアと思たんを今でもよう覚えてる。

オレより1つ年上で市内の病院に勤めてる準看護婦さんやった。別嬪さん言う訳やなかったけど、口が大きくゆうて笑顔の優しい人やった。ひと目見たときから何か惹かれるもんがあって、しばらくは遠目に観察してたんやが、そのうち恋しゆうて恋しゆうてたまらんようになった。

なんであんなに五月さんに惹かれたんやろと振り返って考えてみると、あれは五月さんの笑顔がおふくろに似てたからやったんやと思う。オレは知らんうちにおふくろの面影を五月さんの笑顔の中にダブらせていたんやろな。

みっちゃんも経験があるやろ。好きで好きでたまらんのにどうしても声をかけられへん。何か気が変になりそう。私のこの胸、キュン、キュン、キュンいうやつや。それって何やて？ え、知らんのか。最近テレビで中学生の仲良し3人組がよう歌てるやんか。

オレも五月さんのことを考えると、胸が締め付けられるようでたまらんかった。ホームルームでフォークダンスをしたとき、はじめて五月さんの手を握ったときのあの喜びは、今でも忘れられへん。嬉しかった。ああ！これが五月さんの手やと思うと胸がドキドキして目がくらみそうやった。

オレがそんなやったから、そのうち五月さんにもオレの想いは伝わったんやろな。どうやら五月さんもオレのことを心憎からず想っているらしいことがわかったときは嬉しかった。何かこう気持ちが高ぶって、何をしててもすぐ知らん間に想いが五月さんのことに向かうんや。

授業中に五月さんを見ているときも、想像の中で五月さんを思い浮かべるときも、いつも心の中で五月さんの姿をチョウカンしてるオレがいた。チョウカンて何やて？ 新聞の朝刊ちゃうぜ。鳥瞰いうたら鳥が上から物を見るように、愛しい人の上空をグルグル回りながら、その人を見つめることや。とにかく四六時中、オレの頭は五月さんへの想いで1杯やったんや。

五月さんの写真はないんかって？ そりゃア、あるよ。人に見せるのんは勿体ないけど、他ならぬみっちゃんのことやから特別に見せたらか。ちょっとコーヒーでも飲んで待っててや。

ほら、この写真や。修学旅行のときのもんで東尋坊で撮ったもんや。風の強い日で、えらい2人も寒そうにしてるやろ。吹き出しの中で、五月さんと2人でいるところを同級生に撮ってもらたんや。

おっちゃんがえらい若いって？ そりゃそうや。オレが19歳のときの写真やからな。どうや、オレの恋人、五月さんの印象は？ ちょっとみっちゃんに似てるような気がするけど、気のせいかなあ。みっちゃん、どう思う？

いかにも寒そうやが、オレの方見てニコニコして笑顔がこぼれるようやろ。なに、おっちゃんも嬉しそうにニヤついてるて？ そりゃそうや。大好きな五月さんとのツーショットやからな。これこそ若き2人の恋人の肖像や。

あんなにも五月さんのことを愛しく想ってたのに、これはどういうこっちゃろ。はじめてデートした日のことは、ほとんど覚えてへん。公園かどこかで手をつないで歩いた記憶が頭の片隅にぼんやり残ってるんやが、たったそれだけや。

オレは嫁さんに、あなたの海馬は一海馬いうのは脳の記憶を司る重要な器官なんやが、その海馬はどこかが欠損してるんちゃうかってよう言われるけど、確かにそうかも知れへん。あんなに愛しく想っていた五月さんとの初めてのデートも覚えてへんとは、ほんまに情けないこっちゃ。

その頃オレは、会社の寮を出て4畳半1間のアパートに移ってたんやが、何度かデートを重ねた後、その部屋に五月さんが1度きてくれたことがあった。

おいおい、変なこと想像すんなよ。今頃の早熟な高校生と違って、オレはまだウブやった。黙って、五月さんの手を握るんが精一杯やった。甘酸っぱくて愛しい想いを表現する方法をそれしかオレはまだ知らなんだんや。

このアパートには1階に共同の炊事場があつて、そこでときどきオレも物を煮炊きしていたんやけど、そんなときオレはカレーを作ってたんやろと思う。部屋で2人でカレーを食べたのを覚えてる。給料がまだ8千円ぐらいやったから、オレも相当に貧しかった。肉の代わりに魚肉ソーセージを入れたカレーやった。それを2人で食べたんや。

あんどきオレは、五月さんへの想いで身も心も上気してたから、五月さんと何を話したかよう覚えてへんけど、五月さんが「私は天涯孤独の身の上です」言うたんはよう覚えてる。叔父さん夫婦に育てられてここまで来たんやけど、叔父さんとも子沢山であまり裕福やないから、私も中学校を卒業して準看護婦になった。早く高校を卒業して正看護婦の資格を取りたい。そう言うてたな。

カレーを食べた後、ラジオを聞きながら2人して手を握り合つてじっとしてた。目を合わせるんもなかなか恥ずかしゆうて、あらぬ方向に視線を投げながら、それでも五月さんの手の温もりに動悸が高鳴ったもんや。それだけやったけどオレにはそれで十分やった。

けど後から考えると、きっと求めれば五月さんも応じてくれたやろに、あんどきなせオレはキスせなんだんやろと残念でなア。あのとキスしてればそれがオレのファーストキスになって、オレのこの胸は恋する喜びに打ち震えたやろに。そしてその感激が忘れられない大切な記憶になって、オレの一生の宝物になったやろになア。何とも返す返すも残念や。

そうこうしてるうちに卒業のときがきた。オレはあの頃、向学心に燃えていてどうしても大学に進学したいと思てた。将来何になろう言う確かな夢があつた訳やないけど、もっともっと勉強をしたい、そう真剣に考えてたんや。五月さんへの想いは強かつたけど、それ以上にオレは、印刷会社やない、もっと広い世界に羽ばたきたかつた。

高松には夜間大学はなかつたから、オレは大阪の大学の入学試験を受けることにした。先輩を頼りに浪速市にも就職できることになった。そんでオレは大阪に出ることを決心したんや。

五月さんは、オレが高松を出発するときには見送ったげる言うてたけど、来てはくれへんかつた。あれは悲しかったなア。文字どおり後ろ髪引かれる思いで、オレは大阪に向けて高松港から船に乗ったんや。

ボーッと汽笛が鳴って、オレはデッキに立ち、船が離れていく接岸線にまばらに見える見送り人のどこかに、五月さんがいるんやないか、ひよっとするとどこか建物の影にでも隠れてオレを見送ってくれてるんやないかとじっとあたりに目を凝らしたもんやつた。

船が港を離れて、船体の後尾から扇形に沸き起こっては泡立って消えていく白い波を、デッキに立って見ていたら、その白波がオレに行くな行くな言うて呼びかけてくるようで、思わずこみ

上げてくるものをこらえられんかったなア。

徐々に視界から遠ざかって消えていく港の町並みが薄ぼんやりと見えたんは、あれはもやだけのせいやなかった。オレの涙がそうさせたんや。でもあんときは悲しかったけど、失恋した訳やないと思てたから辛うはなかった。

大志を抱いて大阪へ出て行くんや。そのことは五月さんもわかってくれてる。五月さんに会われへんのはしばらくの間だけや。五月さん、オレの頑張りをしっかり見ててや。まあ、いわばそんな心境やったな。

五月さんが見送りに来てくれへんのは悲しかったけど、辛うはなかった言うのんはそこんところや。わかるか、みっちゃん、そこんところの男心の機微。

オレは大阪に出て浪速市に就職し、看護学校に配属されて夜間大学に通うたんやが、見知らぬ地で1人でいると、五月さんが愛しくて愛しくて、逢いとうて逢いとうてたまらんかった。

けど、一念発起してこうして大阪に出てきたんや。途中で挫折してたまるか言う気持ちも強かった。オレもあの頃は若かった。なんとしてもこの大阪で頑張りきるんや。負けてたまるか。そう自分に何度も何度も言い聞かせたもんやった。

その頃、大阪は高度経済成長の中、公害が大きな社会問題になってた。光化学スモッグ警報がはっきりなしに出されて、都市全体が経済成長言う妖怪の出す老廃物のドームの中にすっぽり包まれているような感じやった。あの頃、大阪は水も空気も汚なかった。

公害にまみれた空気は、田舎出のオレを直撃した。鼻がウズウズして目がチカチカ痛み、オレの頭は毎日割れるように痛んで、とうとうこの大阪での生活に耐えられへんようになってきたんや。

看護学校はみっちゃんも知ってのとおり森之宮にあって、大学は三宮にあったから、仕事を人よりちょっと早めに終えて、環状線に乗って大阪駅に出、阪急神戸線に乗り換えて大学に通うという毎日を送ってたんやが、オレはある日の環状線の電車の窓から見た深まっていく秋の夕日を、今でも忘れることがでけへん。

電車が森の宮駅から京橋に向かう辺りは、大阪城公園を中心にJRの引き込み線やビルもまばらな野原が一面に広がっててな、ちょうどオレが電車に乗る5時過ぎになると、その野原から西の空一体がバアツと真っ赤な夕日に染まるんや。いや、真っ赤と言うんは正確やない。それは公害が作り出した人造的な夕日とも言えるもんで、濁った空気を夕日が赤く爛れるように染め上げているようやった。まるで夕日が外の景色を煮えたぎらせているようで、オレはなぜあの家々やビルが燃え落ちへんのか不思議に思うたほどや。

そんでその夕日は、ズキズキする頭痛の中で、こうして都会に出てきたからにはおめおめ尻尾を巻いて田舎に帰る訳にはいかへんという思いと、このままでは心も体もこの都会に押しつぶされてしまうという恐れが一緒くたになって、オレの心の中になだれを打って入り込んできたんや。

その夕日を見ていると辛うて悲しゅうて、オレは泣き出したくなるんを必死にこらえて、「五月さん、助けてや、五月さん、助けてや」と五月さんに心の中で何度も何度も呼びかけたもんやった。

振り返ればあの光景はなんとも鮮烈やったなア。そうや、あの焼け爛れた夕日はあの頃のオレの心の象徴やったんや。

きっと今読んだら、恥ずかしさに耐えられへんやろけど、オレはそんな思いの中で、1日おきに、五月さんに熱烈な愛の手紙を書き送った。そのオレの手紙に3回に1回ぐらいの割合で五月さんから返事がきたんやが、じりじりと待ちに待った五月さんからのその手紙は、いつも手短かで冷静で簡潔な内容やった。

五月さん、オレはこんなに五月さんのこと想てんのに、それはないやろ。五月さん、なんでや。五月さん、好きや大好きや。五月さんの手紙を読むたびにオレはその内容に苛立ち、五月さんへ

の想いを募らせたもんやった。

きっとそんなオレの焦れるような想いは、手紙の中に溢れてたんやないかと思う。そのうちオレの激情を持って余したんやろな、五月さんから返事がこんようになった。書いても書いても返事はこんようになったんや。

不思議なもんで、その頃になったらオレの頭痛もおさまって、体がこの大阪のまちに馴染み始めた。まったく、人の環境適応能力というもんはたいしたもんやで。きっとオレの心と体の中に大阪の何かが住み着き始めた言うことやったろな。

手紙がこんようになって、オレも手紙を書くのに疲れて何ヶ月が経ち、オレの心の中に諦めが芽生え始めた頃、五月さんから唐突に手紙がきた。

今でもその内容はよう覚えてる。それはこうや。

「このたび縁あって、徳島県の材木を商っている人のところに嫁ぐことになりました。これまでのご厚情にお礼申し上げます」

オレはこの手紙を読んで、頭に血が上った。すぐに真っ二つに破りくしゃくしゃにして手紙を壁に投げつけた。

五月さん、こんな別れの手紙ってあるか。こんな情のない手紙ってあるか、そうオレは思たんや。

オレはその日、泣いた。オイオイオイオイ泣いた。不思議なほどに涙がとめどなく出てきて、堰きとめることはでけへんかった。泣いても泣いても、まったく洪水のように涙は溢れ出てきたんや。

今となってみると懐かしい思い出やけど、あのときはほんまに辛かったなア。

ああ、五月さんのことを話すだけで、もう1時間が過ぎてしもた。さア、次は看護学校での話や。看護学校では、教務室に看護婦の先生が7七～8人。教室には看護学生の山。事務員は年配の事務長とナース殺しの異名を持つオレの2人だけ。そうや、まさにオレは女の花園にいたんや。

さあ、これから繰り広げられる酒池肉林の世界、とくとお聞きあれ。え？ おっちゃん、酔っ払ってるって？ そうやねん。五月さんのこと思い出しながら酒飲んでたら、ホンマに酔っ払ってしもたわ。ちょっと休憩しよか。

今日は、母さんがおいしい讃岐うどんを作ってくれてるはずやから、みっちゃんもちょっとよばれといで。



ああ、そうか。オレがウトウトしてる間に、みっちゃんは寮に帰ってしもたんか。みっちゃんに会うたんは6～7年ぶりやけど、ホンマ、大きゅうなったな。それにあんなに五月さんに似てきて。オレ、ホンマ、びっくりしてしもた。兄貴んとこに子どもがいれば、みっちゃんを兄貴夫婦の養女にするなんてこともなかったやろけど、人の運命言うのんはわからんもんやなア。

みっちゃんが養女になったいきさつは、これまでおまえに何回か話したけど、ちょうどいい機会や。今日は五月さんのことを詳しく話してくわ。まア、ここに座りいな。

あれは、オレが大阪に出てきて5年目の春のことやった。ある日、突然、五月さんからオレに会いたい言う電話がかかってきたんや。電話を受けたとき、オレは、ひよっとしたら、五月さんが家を捨ててオレのところにきたい言うことやないか、そう思て胸が高鳴った。オレの五月さんへの想いは醒めてなかったんや。

大阪駅に五月さんを迎えにいったあの日のことは、こう目を閉じたら昨日のようにオレの脳裏に浮かんでくる。世間は春爛漫というのに、五月さんは身を縮めるようにして乳飲み子を抱きながらプラットホームに立った。

まさか子連れとは！ オレが驚いて近寄ると、振り向いた五月さんが、オレの顔を見て泣き笑うた。その表情に付き合っていた頃の輝くようやった五月さんの面影を重ねて、オレは、「やあ」と間の抜けたあいさつをしたんやったが、あの頃からすれば随分痩せてはいたものの、そこに立って泣き笑うたんは確かに五月さんやった。

再会する前までは会うのがひどく気恥ずかしゆうて、会いたいけどこのままどこかに消え入りたような、そんなアンバランスな気持ちやったが、会うてみると、あの頃の燃えるようだった想いが心に一杯になって、オレは乳飲み子ごと五月さんを抱きすくめたい思いにかられたもんや。

タクシーでアパートに着いた後、どういう事情で大阪に出てきたんか五月さんに聞いたが、迷惑をかけてすみません、今日1日ここに置いてください、そう言うて謝るばかりで、それ以上、何も答えてくれへん。叔父さん夫婦や親戚のところにかんと、オレのところにきた言うんは余程の事情があったんやろとは推測はついたが、さて、これからどうしたもんやら、正直、オレは困り果てた。

そこで思いついたんが、看護学生寮の寮母さんや。寮母さんはオレが清明看護学院に配属されてから、田舎出のオレの母親代わりになって、なにくれと気を配ってくれた人やった。寮母さんやったら何かいい知恵があるに違いない思て、オレはその日の夕方、五月さんにどうしてもこれからいかなあかんとこがあるよってちよっと出てくる言うてアパートを出た。

事情を聞いた寮母さんは、とにかく2人を寮に連れてきなさい。私からその人に事情を聞いたげるから、そう言うてくれたから、オレも何か肩の荷を下ろした気持ちになってアパートに帰った。

アパートの玄関に立つと、赤ちゃんのやけに大きな泣き声が聞こえてきた。どうしたんやろ思て

部屋の中に入ったら、なんと五月さんがいてへんやないか。オギヤーオギヤー泣いてる赤ちゃんの枕元に書置きがあった。読んでみると、迷惑をかけて本当にすみません。この子のことをよろしく頼みますという内容のことが、懐かしい五月さんの丸文字で書かれてた。こりゃア、五月さん、1人で死ぬ気や。咄嗟にそう思ったものの、オレに五月さんを捜すあてはどこにもなかった。

母親は子どもを残してそう簡単に死ぬるもんやない、きっとその人はアパートに帰ってくるよ。そう寮母さんに言われ、赤ちゃんを寮母さんに預けてオレは、まんじりともせずアパートで五月さんを待ったんやが、結局、その夜五月さんは帰ってこうへんかった。

どこに連絡しようにも、五月さんの叔父さん夫婦の連絡先も材木屋がどこにあるかもわからん。翌日、オレは同窓会名簿を頼りに同窓生に片っ端から電話して、ようやく材木屋の連絡先を見つけることができたんやが、五月さんは材木屋から逃げるようにしてオレのところに来たことを考えたら、そこに連絡する訳にはいかへん。

仕方ない。オレは赤ちゃんの面倒を寮母さんに頼んで、しばらく様子を見ることにした。

けど、新聞にはそれらしい死亡記事は出てへんし、近くの警察でも情報は得られんで、1週間経っても誰からもどこからも何の音沙汰もなかった。

寮母さんは、気にするな。赤ちゃんはちゃんと私が見といたげる言うてくれたけど、このままその好意に甘え続ける訳にはいかへん。

オレは考えあぐねて、当時、上司で看護学院の事務長をしてたおまえのお父さんに事情を打ち明けたんや。

お義父さんは親身にオレの相談に乗ってくれはった。1週間も経ってどこからも何も連絡がない言うんはどう考えてもおかしい、材木屋で何があったかはわからんが、とにかくそこに連絡せなあかん。そう言うて、オレに代わって材木屋に電話をしてくれはった。

その電話口に出たんは材木屋の社長やったが、お義父さんが事情を話すと、確かに息子の嫁に五月という女がいてたが、2ヶ月前に離縁した。今はその女は当家とはなんのかかわりもない。五日ほど前、石川県の警察からも問い合わせがあったので同じことを答えた。そう言うつつけんどんな答えが返ってきたんや。

ああ見えてお義父さんは、結構短気なところあるから、その答えに頭にきて、その社長に、「離縁した言うけど、お孫さんを返さんでもよろしいんか」て言うたら、「不義でできた子なぞ誰がいるか！」言うて社長にどなられ、これにはお義父さんも言葉が出えへんかった言うてはったなア。

石川県の警察から問い合わせがあったと社長が言ったと聞いたとき、オレにはピンとくるもんがあった。そうや。修学旅行で五月さんと一緒に写真を撮ったあの東尋坊や。あっこは昔から自殺の名所やからな。

オレはすぐに東尋坊を管轄している警察署に電話をした。すると案の上やった。1週間前に自殺者がいてたんや。けど死んだんは五月さんだけやない。心中やった。両足を紐でくくって2人して絶壁から飛び込んだという話やった。それを聞いて、材木屋の社長がいった不義とはこのことやなどオレは思った。

五月さんは遺書を残してなかったけど、相手の男が母親に遺書を残してて、それで2人の身元が

わかったんや。オレが警察に電話をしたその3日前に、男の母親が2人の遺体を引き取りにきたということやった。

オレは担当の警察官のこの話を聞きながら思ったもんや。

五月さんはどこぞの施設の玄関がわりにオレのアパートを使たんや。五月さんは、今日1日アパートに置いてくれ言うて、オレに謝るばかりやったけど、オレのところにきた目的は、赤ちゃんをオレに押し付けて、自分は好いた男と死のう言うことやったんや。五月さん、それはないやろ。オレはとんだピエロやないかってな。

オレは、情けないやら、悔しいやら、切ないやら、ほんま、そんときばかりは五月さんが恨めしゅうてたまらなんだ。

五月さんと心中した男の母親を、お義父さんと一緒に徳島県に尋ねたんは、それから半月後のことやった。警察に連絡先を教えてもろて男の母親に電話をし、この間の事情を話すと、母親は一瞬絶句した後、私達は母1人子1人で、その息子が死んだ今、この歳で孫を引き取って育てる言うことはとてもできません言う内容のことを消え入るような声で言いはった。そんで、こりゃア、電話ではダメや思て、お義父さんと一緒に男の母親のところに行ったんや。

男の母親は材木屋の隣町の町営住宅に住んでた。70歳をちょっと過ぎたあたりの年で、内臓のどこかが悪かったんやろな、何か青白っぽい顔つきをしていかにもしんどそうやった。

家の中に通されたお義父さんとオレは、4畳半1間の箆笥の上に侘しげに置かれてた2人の位牌に手を合わせた後、母親から事の顛末を聞いた。と言うても、この母親も今回のことはあまりに唐突なことで、何でこんなことになったんかようわからん風やった。生前に息子から聞かされた話を、とりとめもなくお義父さんとオレに話してくれてるいう感じやったな。

母親の話をかいつまむとこうや。材木屋の親夫婦はかなり吝嗇で、五月さんを召使のように使ってた。そんでも五月さんに子どもでもできたら、また状況は変わったやろが、なかなか子どもがでけへん。その上、五月さんの叔父さんは材木屋の下請けのような仕事をしてたんやが、事業に失敗して倒産し、一家は離散してしもた。五月さんの夫はちょっとおつむが弱く親の言いなりやったから、そんな五月さんを庇うようなことはせえへんかった。そこに現れたんが心中相手や。

材木屋言うても家内手工業のようなもんやから、従業員は10人たらずやったが、心中相手は高校卒業後、親戚の縁で材木屋に就職し、庶務的なことを任されていたらしい。五月さんより3つ年下やった。男はよく家に帰ると、親にあんな仕打ちをされて奥さんがかわいそうや、言うて五月さんにえらい同情してたと言う話やった。

けど男の様子は五月さんが妊娠したと知ったときから急に変わった。これで奥さんもこれまでみたいな仕打ちを親から受けんですむ言うて、心から喜んでたらしい。

男の母親はここまで話して、その子どもがまさか息子と五月さんの間にできた子やったとは、そう言うて溢れる涙を懸命にこらえてた。

最後に母親は、孫は私の手で育てたいが、わずかばかりの年金では私1人が食べていくのがやっとなです。それにもうこんな年になって、体力的にもとても孫を育てるなどということはできません、そう言うて泣きながらオレ達に深々と頭を下げはった。そんな母親の姿を見てたら、こっちも涙を誘われて、オレもお義父さんも、それ以上、預かっている赤ちゃんを引き取れとは言えなんなんや。

母親の話と材木屋の社長の言葉を合わせ考えたら、事の顛末はこうや。

嫁いびりに会うてた五月さんとそれに同情したその男はいつしか愛し合うようになり、五月さんはその男の子どもを身ごもった。ほんで2人はその子の父親が誰であるかを材木屋の親夫婦に隠し、その子を材木屋の子として育てようとした。ところが何かの拍子にそれがバレてしもて、

2人とも材木屋にはおられんようになった。

けど、ホンマにそうやろか。何かオレには腑に落ちんもんがあった。もしその通りやったとしたら、材木屋の息子のおつむが弱いことをいいことに、五月さんとその男がつるんで材木屋の乗っ取りを図ろうとしたともとれる。けど、そんなことをあの五月さんがするやろか。そんな厚かましいことを考える人間が、それがバレたから言うて2人して心中しようなんて考えるやろかとオレは思たんや。

考えてもみ。2人の関係がバレた言うても、そんで2人の間が引き裂かれた訳やない。逆に五月さんには離縁されたことによって、これから男と子どもと男の母親と親子4人で生きていくと言う選択肢もあったはずやないか。

男の母親が死んだんは、事件があつてから5年後のことやったが、おまえにはまだ見せてなかったけど、実は母親が死ぬ前にオレに手紙をくれたんや。その手紙の中にはな、男の遺書が同封されてた。その手紙と遺書、持ってくるからちょっと待っててや。

これや。遺書の方をちょっと読んでみ。これまで育ててくれた母親に対する感謝とこうなったことに対する詫び、それと五月さんを庇う内容で一杯やろ。中ほどに、一緒に死んでくれ言うて頼んだんは自分の方で、五月さんの方やない。五月さんに罪はない。五月さんを恨まんといて欲しい言う内容が切々と書かれてる。子どものことは最後にたった一行、知り合いに預かってもらたから心配はないとあるだけや。

冷静に考えたら生きる道はいくらでもあつたやろに、この手紙だけから推測したら、男は自暴自棄に陥って、五月さんはその男の思いに引きずられた言うことかも知れんし、他にもっと深い事情があつたんかも知れん。

男が子どものことをあんまり気にかけてなかったことやあれこれを考え合わせたら、さっちゃんも五月さんと材木屋の息子との間にできた子やなかったやろかとも思える。そやのに、材木屋の社長夫婦に勘違いされてしもた。ほんで、男と死ぬにしても、このままさっちゃんだけこの世に残すんはあまりに不憫や思て、心中の道連れにしようと考えたんやないか。ほんで乳飲み子抱えて2人して死出の旅に出たもんの、やっぱり子どもを道ずれにはできんと途中で考え直して、そこで五月さんはオレのことを思い出したんとちゃうか。そんな風にも思えるんや。

けど、事の真相はあんときもそして今もようわからん。母親に会うたとき、材木屋にいけば事の真相がわかるかもしれへんと思たが、社長の電話の反応からみて、会ったところでけんもほろろの対応をされるに決まってると思た。

あんとき、これ以上真相を追求してもどうなるもんやない。あの子をこれからどうするか、それを1番に考えんとあかん。そうお義父さんと結論が一致してな、オレ達は大阪に帰ることにしたんや。

帰りは高松港から船に乗った。ちょうど5年前に、後ろ髪引かれる思いで、どこか建物の影で、五月さんがオレを見送ってくれてるんやないかとその姿を追い求めたあの船や。

オレは船尾に立ち、離れていく接岸線で見送ってる人や遠ざかる町並を見つめながら、5年前のあの日のことを思い出した。あるとき、大阪に出て、きっと何者かになってやるぞと言う猛る気持ちと、大阪という大都会で生きていけるやろかと言う不安と、五月さんへの想いが、オレの心の中で複雑に絡み合ったんやった。

そのときの気持ちを思い起こして反芻しながら、ひよっとすると半月前にはこの同じ船尾に、五月さんが乳飲み子を抱きながら心中した男と一緒に立っていたんかもしれんと思うと、オレはなんとも切なかった。

オレはそのとき、今はもうこの世にいない五月さんにこう声をかけたんや。

五月さん、何でこんなことになったんや。五月さんを大阪駅に迎えに行ったとき、子連れであることに驚いて、何という再会やと思たけど、もし、五月さんが大阪でオレと一緒に暮らしたい言うてくれたら、オレはそうしようと考えてたんやで。寮母さんそこへ行ったんも、当面、どうしたらいいか相談するためやったけど、これからどうしたら一緒に暮らせるかについても相談したい思たからやったんや。

涙を溢れさせてるオレの姿を見て、お義父さんが、「まア。そう気を落としな。五月さんがおまえんここに赤ん坊を抱いてきたんは、おまえのことを余程、信用してたからやろ。五月さんは親戚でもない友人でもない、他ならないおまえに子どもを託したんや。その気持ちに応えたらんとあかんぞ」そう言うて、オレを慰め、励ましてくれたけど、オレはこみ上げてくる思いをどうしても止められなんだなア。

おっ、おまえ、妬いてるんか？ もう随分昔のことや。そんな顔せんといてな。オレは、今はおまえのことを1番大事に思てんで。何や、赤うなってからに。言うてるオレの方が恥ずかしいやんか。

港とその後ろの山並が薄黒い固まりに見えはじめて、船の周りから島影が消え始めてな、穏やかな海原の中を、船はすべるように、一路、大阪に向かったんやが、その船の上で、オレはお義父さんにかねてから考えてたことを相談した。それはみっちゃんを兄貴夫婦の養女にする言うことやった。もう、材木屋の子どもとして届けられてたら、そんなことできるやろか言う心配はあったが、そんなんはオレの知ってる弁護士に相談したらなんとでもなるやろ思た。その頃、兄貴

は無精子症とわかってひどく落ち込んでたから、事情を話したら興味を示すかもしれへん思ったんや。

さっき、みっちゃんに五月さんの写真をみせてくれ言われたときは、ちょっとどうしたもんやろ思たけど、みっちゃん、ホンマのお母さんの顔見て、何か感じるこゝろがあつたやろか。

みっちゃんはあるに賢いんや。材木屋の息子は、少々、おつむが足らなんだ言うから、やっぱりみっちゃんは、五月さんと心中した男の間にできた子かも知れへんと、この頃オレは思たりもしてるけど、もう、そんなことはどうでもええ。みっちゃんには五月さんの分までこれから幸せになつてもらふことが1番大事や。

みっちゃんは兄貴夫婦のホンマの子どもやない言うことは、みっちゃん自身、もう知ってるようやが、その訳を兄貴夫婦に問いただすようなことはこれまで1度もなかつたて兄貴は言つた。けど、みっちゃんも本音の部分ではそのことを知りとうてたまらんやろ思う。

いつかはオレの口から事情を話さんとあかんときがくるやろ。そんなときは、今、おまえに話したすべてのことを、オレはみっちゃんに教へたる思てる。

おまえも、今は寮母代理みたいなことをしてるんやから、これからはみっちゃんのことをいろいろ助けたつてや。うちの隆や里美がこうしてスクスク育つてんのはお前のお陰やと、オレはいつも感謝してる。なア、みっちゃんのこと、ホンマ、よろしゅう頼んだで。

(了)

みっちゃんへ

<http://p.booklog.jp/book/53209>

著者：田中かわず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/1121abc/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53209>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53209>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ